

## 「青春の奇跡（軌跡）」

猪瀬昌紀

朝鮮総督府鉄道局鉄道員として、北朝鮮の平壤（今のピョンヤン）で18歳（昭和20年）のとき終戦、同時に天地が引っ繰り返ったようで、仕事は無くなり、住んでいる寮からは追い出され、一般の収容される身となり、購買所（空部屋30畳位）に50人くらいが入った。9月でしたがコンクリートの土間にごろ寝で過ごしました。食事はとうもろこしの蒸したものの茶碗1杯を1日2回、腹が減るので近くの野菜畑から“とうがらし”を採ってそのまま食べた。そんな記憶が残っています。

10月に入り、寒さが出てきたので、独身者（朝鮮語で「チョンガー」といいます。）は全員揃って朝鮮人合宿（寮は朝鮮人が入っている。）に移りました。

オンドルのある土造りの長屋住宅で冬の到来を待つことになったのです。（オンドルは土床の下に煙が通る路があり、煮炊した熱が床を伝って暖房となるもの）布団は無く、着の身着のままで過ごしたのです。

毎日働ける者達は、水汲み、薪割り、炭殻（石炭の燃えかす）積み等の賃働きで報酬を得て、全員掘出して食糧を買い生活していました。

その時期に突然、私に呼出しがあり、前歴使用と機関車乗務の手伝いとのことで技術者のみ平壤機関区に集まり、仕事の内容を説明される。（機関車回収の人出が足りないから手伝う。修理の上基地へ集める。）修理技術者、機関車乗務員は40～50歳、若手は18～19歳で缶焚き、20～30歳代は応召または特別徴用で皆無。

各駅で動かなくなった機関車（理由はソ連軍の指揮でどこまでも運転させられるので、機関車乗務員（朝鮮の人達）は途中で逃げ、家族のもとへ戻るため、車両はそのまま）を我々が回収にあてられたのです。

運転作業は主に貨物列車、ソ連軍の指揮のもと、機関車に同乗され、自動銃を持ち「ダワイ（ロシア語、「行け」の意味）」と指示される。ラボータ（ロシア語、「仕事」の意味）の見返りに米と塩サンマが支給された。その米がもち米で毎日毎日そのご飯と塩サンマの食事にはうんざりしたものです。北朝鮮の各地“陽徳、高原、元山、威興、清津”回り乗務を続けていました。冬は寒いが機関車は火を

焚<sup>た</sup>いているからなんとかしのげました。

昭和21年9月下旬、内地引揚げ<sup>ないちひきあげ</sup>の通知が入り、手荷物をまとめて引揚者<sup>ひきあげしゃ</sup>の集団に入り、南朝鮮<sup>みなみちようせん</sup>の38度線<sup>こ</sup>を超えるまで歩くのだと指示に従い徒歩行が始まったのです。朝、夜明けとともに歩き出し、日が暮れるまで、野宿を重ね、言語に絶する苦しみを味わい、時には通行税といい現地人から金品をまきあげられ、病人は置き去り、死人は見捨てられ、生き地獄<sup>じごく</sup>とはあのことだと、今でも脳裏を離れません。人間として生きてきてあのような場面<sup>あ</sup>に遭<sup>あ</sup>うことは今後絶対あってはならないと思います。

38度線を目の前にした頃<sup>ころ</sup>、いろいろ注意があったのですが、夢中で道路を歩きました。“見つければ撃たれるぞ。”その声も聞きましたが、そんなことはわかりません。夢遊病者<sup>むゆうびょうしゃ</sup>のようだったのでしょう。開城<sup>かいじょう</sup>の収容所に入りただ生きていくというだけ、便所は長い堀<sup>ほり</sup>に男女混合で使用し、拭<sup>ふ</sup>く紙は新聞紙が切って下げてあるのを用前に取り使った。死人が出てもその片付けはジープの後の牽引車<sup>けんいんしゃ</sup>に山と積まれ運んでいました。

開城<sup>かいじょう</sup>収容所の食事はとうもろこしの油しぼり糟<sup>かす</sup>（丸い大きなもの）を煮<sup>に</sup>て、1日2食（空き缶<sup>かん</sup>）で手で取って食べた。量は少ないが、一粒<sup>ひとつぶ</sup>

ひとつぶ ひとつぶ か たいざい  
一粒と言っても粒は無いものを、噛みしめ味わった。3日間滞在し、  
いんちよん けいじょう いんちよん  
仁川収容所へ移動となり、トラックに乗せられ京城を通り、仁川  
収容所へ着く。この食事はうどんとは名ばかりで、ゆで汁に数本  
あるだけ。汁を吸って食事1日2回。このような食事でしたから、  
弱いものは死んでしまいました。

なんせん しょくりょう こうかん  
南鮮に入ってから10数日が過ぎ、手持ちの金品は食糧と交換  
かいむ いんちよん  
し皆無、体一つが残りました。仁川収容所では来る日も来る日も材  
木の上にあがり、港の船をながめ、帰国を待ちました。1週間位し  
て帰国乗船の知らせがあり喜びあったものです。仁川港は遠浅との  
こと、おき ひきあげせん うれ  
で、沖の引揚船まで小型船で送られ、やっと帰れる嬉しさがこ  
みあげてきました。貨物船で私達若者は船底が割当て場所となり、  
むしろしき ね かんばん  
筵敷の上で寝起き、便所は甲板上の船外仮設で下は海、船底からの  
のぼ ふうろ かんばん  
昇り降りも大変。また風呂も甲板上でシートで囲われ青空天井。体  
がかゆいので海水風呂に入った。(透明度ゼロ) そのかゆさが“かい  
せん (疥癬)” だったのです。帰国して難病で、毎日硫黄風呂に入  
り、1カ月位で治りました。

船内での食事は“とうもろこしがゆ” やはり1日2食。内地が見  
え明日は上陸できると皆喜んでいましたが、検疫の結果 (保菌者が

いる) 2週間の港外隔離こうがいかくりとなり全員がっかり。検疫けんえきが解かれ、やっ  
と佐世保させぼに上陸し、旧兵舎跡に入りDDTを頭からかけられ、食事は  
さつま芋いものむしたもの、衣服が支給(旧軍服)され、旅券りょけんと一時  
金をいただきそれぞれ個々に別れ故郷を目指しました。大阪駅で初  
めて白米のおにぎりを食べ、嬉うれしかった。

以上が、かいつまんだ記憶きおくの点、もっといろいろな苦しみをした  
のですが割愛かつあいさせていただきます。

